「地域内エコシステム」成果報告会
開催日時：R4.3.2（水）18:30～20:00　　開催場所：役場庁舎１階健診ホール

意見交換（質疑応答）Q&A

（１）基調講演についての質疑応答（山本教授回答）

Q1.発電に使用するヤシ殻について、安定的に量を確保できるのか。また、ヤシ殻とペレットを混ぜて発電することはできるか。

A1.ヤシ殻については、今の日本の FIT 価格が高いため、供給が滞ることはない。ヤシ殻とペレットについては、直接混ぜるのは別として、同じ発電所で燃やすことは可能。

Q2.（チャット質問）ヨーロッパでの再造林は誰がしているのか。

A2.最近は皆伐がほぼ禁止されているため、択伐されている。択伐されると、稚樹が下から生え、天然更新となる。そのため、再造林は行われていない。日本の自然環境ではそうはならないため、再造林は地元が頑張らないといけない。

Q3.（チャット質問）チップ材として木質バイオマスにすることは、大変良い事だと思うが付加価値の高い木（桜の木等）まで関係なくチップ材にしている現状をどう思われるか。

A3.津別町では、木質バイオマスの利用の推進と並行しながら、付加価値の高い木は建築用材や製材、木材工芸といったマテリアル利用も推進されている。
個人的には同じチップにするのであれば燻製での利用などのもっとお金になる形でやった方が良いと思っている。残念ながら日本では燻製等に使用する木材の流通がうまくいっていない。どうしても大量に持って行って安上がりに卸してしまう。チップに加工する前、燃やしてしまう前に使えるように検討するには、木材利用や市場、価格や流通をどうするかといったことを考える必要がある。

Q4.（チャット質問）チップによる熱供給とペレットによる熱供給のコストはチップの方が安上がりなのか。

A4.製造という視点だと、ペレットは作るためにコストがかかるが、チップは砕くだけのため、チップの方が安い。
しかし、ボイラーの導入がされた時の管理はペレットの方が楽。

（２）成果報告についての質疑（兼平係長回答）

Q1.ビニールハウスでの野菜作りや足湯、雪を無くす等に熱を使えないか。

A1.ビニールハウス利用については、3 年間研究をしたが、末端消費者まで見据えた形の仕組みづくりが当時できなかった。作りたい人、買いたい人たちが集まって協議しなければ難しい。足湯や雪を無くす等、夢ある話だと思う。そういったものも頭に入れながらこれからの再エネの推進に活かしていきたい。

Q2.バイオマスセンター、事業費と補助金について教えてほしい。また、センターの運営は誰が行うのか、雇用は何人くらい生まれるのか。

「地域内エコシステム」成果報告会
開催日時：R4.3.2（水）18:30～20:00　　開催場所：役場庁舎 1 階健診ホール

A2.事業費については約 5 億円。補助率 2 分の 1 の補助金を活用予定で現在計画書を作成中。町が使うお金については、過疎債を活用予定。センターの運営については民間での運営を考えている。指定管理制とする。新規雇用は 2 ～ 3 人。

Q3.バイオマスセンター年間のチップの生産量、生産したチップはどこへ販売するのか。
A3.チップは約 9,000 ㎥生産。ほぼペレットの原料として販売し、残りは公共施設のボイラー、家畜敷料などとして販売。

Q4.発電はしないのか。
A4.非効率のためやらないが、発電に必要な充分な材の確保ができるのであればチャレンジしていきたい。現在生産しているペレットの倍の原料と生産が必要。

Q5. （チャット質問）ウッドロスマルシェで、空き家などを解体した時にでる廃材などの利用はむずかしいのか？
A5.むずかしい。釘等の金属物が混入していると、チップ製造設備の故障及びチップの品質低下を招くため。また、防腐剤などの塗料が付着していると、燃料用チップとして使用できないため。

Q6. （チャット質問）原材料の供給量が一定量で確保できないとチップ・ペレットによる熱供給の計画が担保できないと思う。原材料の確保量の見通しを知りたい。
A6.計画では、低質材 1,500 ㎥、追上材 1,000 ㎥、ウッドロスマルシェによる受入れ 161 ㎥、農地支障木 1,000 ㎥、合計 3,661 ㎥としている。成果報告会資料の「本町が目指すサプライチェーン」（スライド 11）を参照されたい。